九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡県飯塚市立岩遺跡発見の前漢鏡とその銘文

岡崎, 敬

https://doi.org/10.15017/2244077

出版情報：史淵. 99, pp.77-90, 1968-01-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

福岡県飯塚市立岩遺跡発見の前漢鏡とその銘文

岡崎　敬

一、飯塚市立岩遺跡

立岩遺跡は遠賀川上流にのぞむ弥生時代の遺跡群である。昭和八年、市営グラウンド及び住宅街の開発のため、甕棺群[1]及び石庖丁製作所址[2]が発見され、中山平次郎博士によつて調査された。その後、森貞次郎[3]、児島隆人[4]、名和羊一郎、清賀義勇、沢井一雄、藤田等、高島忠平氏および筆者[5]らによつて戦前戦後を通じ調査されてきた。昭和三十三年六月上旬立岩、小字下方で採土工事中、甕棺群があらわれ、高島氏の注意により、児島隆人、藤田等氏をはじめ嘉穂高校、嘉穂東高校の郷土部諸君が緊急の調査（第一次）中に前漢鏡など重要な遺品が発見されたので、工事を一時中止して、飯塚市の行う緊急調査として、国及び県の一部補助を得て調査をすすめることになつた。この回（第二次）は金関丈夫、鏡山猛、児島、岡崎をはじめ森、藤田、小田富士雄、松岡史、牧山重信、永井昌文、乙益重隆、三島格氏らや九州大学、熊本大学、嘉穂高校、嘉穂東高校の学生、生徒諸君が参加し、福岡県教育委員会より渡辺正気氏が衝にあたつた。直後に梅原末治、有光教一、斎藤忠、小林行雄、杉原荘介の諸博士、三木文雄、保坂三郎氏らが来観指導された。

発掘地点[6]は立岩丘陵の北部、測候所と道一つへだてたところで、東西をみわたせるやゝ高地にある。六月十二日より二十四日に至る約二週間、調査を行い、二十四個の袋状竪穴群と三十四基の甕棺群があらわれた。袋状竪穴は花崗岩バイ爛土壌にきりこまれ、出土の土器からみて北九州弥生式前期末を主体としており、この竪穴が埋つたあと、弥生式中期以

降、甕棺墓地となつたものと考えられる。

甕棺は方形または矩形のプランの土壙の一側面に横穴をほり、これに挿入され、石蓋をして、埋葬がおわつたのち、土壙は再びうずめられたようである。

第十号甕棺はもつとも完整なつくりで、内部に酸化鉄をぬり、底部に一孔をうがつ。内部には左右各々三面二列、鏡面を上にして前漢鏡が発見され、右側に細形銅矛一口、鉄剣一口、鉄鉋（やりがんな）一口をそえ、やゝはなれて奥に砥石二個がおかれていた。おそらく中央の空地に遺骸があり、それに副葬したものである。鏡（1～6）は、重圏、内行花文式各々三面、計六面で鋳上り、仕上げもよく、銘文も長文で、完全なものが少くない。

第二八号甕棺も、第一〇号甕棺と同時期のもので、土壙中の側壁にきりこんだ横穴に挿入され、石蓋があつた。内部は同じく酸化鉄でぬられ、底部に一孔を穿つ。甕中より素環頭鉄製刀子一口、重圏「昭明」鏡（鏡7）とともに、ガラス製管玉五七〇個を組合せた首飾りが、装着のままあらわれ、須玖遺跡でかつて出土したものと同形の塞杆状ガラス製品五個もそれにとりつけられていた。これも遺骸は全く消滅しさつていたが、これらの副葬品からみて女性のものであり、第一〇号甕棺はこれに対して男性のものとすることができるであろう。

ブルトーザをとめ、梅雨の間断をぬつて行われた第一・二次の調査は全く調査員の献身的努力におうものであつたが、一部とりのこされた地域がある。第三次の調査[7]が企画され、今次は飯塚市教育委員会と九州大学によつて昭和三十五年三月二十二日より、四月五日まで行われた。児島、森、岡崎、藤田、小田、高島、前川威洋、石松好雄、宮小路賀宏、下条信行らが参加、永井昌文助教授は今回の出土人骨の調査に精力を集中、長崎大学より内藤芳篤、東京国立博物館より西田守夫氏が来援された。

第三次の調査では袋状竪穴五個を加え、通計三十個、甕棺五個を加え、通計三十九個となつた。この回は土壙中ふかくさらにその横穴におかれた石蓋の甕棺より、前漢鏡とともに鉄器が多数発見されたことは注意される。

第三十四号甕棺では、巻貝を縦切にした貝輪十四個を右腕にはめた壮年男性の人骨が発見された。腹部の上には鉄戈を横におき、また頭骨下から小形の内行花文「日光」鏡（鏡9）が出土した。

第三十五号甕棺からも同じく成年男性の人骨が発見された。これには右腕に接し、鉄剣一口、鉄戈一口があり、左側に内行花文「清白」鏡（鏡8）一面がおかれていた。また棺外口縁部附近よりガラス製管玉三〇～四〇個が出土した。

第三十九号甕棺には熟年の男性の人骨があり、右腕の右側に鉄剣一口、頭部の右側に単圏「久不相見」鏡（鏡10）がみられた。

これらの発見遺物は、昭和八年以来の出土品とともに、飯塚市立岩、旌忠公園内に新設された収蔵庫におさめられた。調査の全期間にわたり、収蔵庫の建設にあたり、飯塚市長青山了、議長藤内芳兵衛、教育長大村虎雄、社会教育課長松岡武雄氏や野沢静治氏らの努力や地元の麻生太賀吉氏をはじめ、浜正雄、円城寺次郎氏、福岡県教育委員会、福岡ユネスコ協会の助成はわすれがたいものがある。

立岩・下方遺跡における前漢鏡の発見は三雲、須玖につぐものであり、しかもこれが緊急調査とはいいながら学術発掘の行うことができたのはきわめて幸いとするところであつた。立岩遺跡は弥生式前期より中期にわたる大聚落であり、この度の調査は弥生式文化の内容の充実、古代墳墓の問題[8]の年代決定のみならず、漢帝国との文化的交渉という問題にも基礎的資料を提供したということができる。現在、報告書を作製中であるので、これらの詳細はそれにゆずることにしたい。

註

（1）中山平次郎「飯塚市立岩運動場発見の甕棺内遺物」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告9』）一九三四年

（2）中山平次郎「飯塚市立岩焼ノ正石庖丁製造所址」（福岡県報告9）一九三四年、〃「飯塚市附近の遺跡より出土せる石鎌ならびに其の系統に就いて」（『考古学』五―四）一九三四年

（3）森貞次郎「古期弥生文化に於ける立岩文化期の意義」（「古代文化」一三―七）一九四二年〃「飯塚市立岩に於ける環状石籬甕棺墳」（「古代文化」一三―六）一九四二年

（4）児島隆人「遠賀川流域に於ける青銅器文化」（「古代文化」一三―七）一九四二年

（5）岡崎敬「遠賀川上流の有文弥生式遺跡地」（「考古学雑誌」二九―二）一九三九年

（6）児島隆人、森貞次郎、渡辺正気、藤田等、岡崎敬「七面の前漢鏡を出した飯塚市立岩調査概報」（日本考古学協会発表要旨）一九六三年（九州考古学20・21）一九六四年
藤田等「福岡県飯塚市立岩甕棺遺跡」（「考古学研究」38）一九六三年

（7）児島隆人、藤田等、永井昌文「飯塚市立岩遺跡の甕棺葬と人骨」（日本考古学協会発表要旨）一九六五年

（8）小田富士雄「発生期古墳の地域相」―北九州について（「歴史教育」一九六七―四）

二、立岩遺跡発見の前漢鏡

先にのべたように第十号甕棺より六面（鏡1～6）、第二十八号甕棺より一面（鏡7）、第三十四号甕棺より一面（鏡9）、第三十五号甕棺より一面（鏡8）、第三十九号甕棺より一面（鏡10）、計十面の鏡が発見された。これらの甕棺はすべて弥生式中期のもので、その形式及び葬法に共通の特色をもつてある。鏡の十面中、7は中形、9、10は小形鏡であるが形式、銘文ともに同一の特色をもち、前漢後半の形式のものとみてさしつかえない。中国科学院考古研究所夏鼐先生の訪日にあたり、目加田誠教授はじめ九州大学文学部中国文学研究室、東洋史研究室諸氏の援助を得てその釈読[1]をほどこしたのであるが、第三次の調査によつてさらに三例を加えたので、いま改めて釈読を加えてみたい。

漢鏡銘辞の釈読は清朝の考証学者孫星衍が『続古文苑』中にこれをこころみ、わが富岡謙蔵[2]氏は北九州の弥生式遺跡の三雲（福岡県糸島郡前原町）、須玖岡本遺跡（福岡県筑紫郡春日町）発見の銘文を釈読してこれを前漢鏡と断定した。富岡氏の遺業を継承発展させた梅原末治博士は須玖[3]及び井原[4]（福岡県糸島郡前原町）発見の鏡を復原し考釈を下している。梅原博士は「漢鏡とその文字」[5]（平凡社版『書道全集』2）に、諸家の説を収めてもつとも新しい読みを与えている。前回の釈読にあたり、これらの説を参考にしたことはもとよりであるが、それでもとけない所が少くなかつた。これらの諸点について西田守夫氏の教示[6]に負うところが多い。本稿において従来の釈文を一歩すすめることができるとすれば同君の協力によるものである。

鏡1・3・4・6は比較的文章に欠字がないが、鏡2・5・8はかなりの欠字があり、そのまま文字をつづけている。鏡7の銘文は鏡2・3・6の内区の銘文にあたる。鏡2は「絜精白」、鏡3・5・8は「契清白」にはじまり孫星衍がはやく指摘し、駒井和愛博士の考証[7]された如く『楚辞』中の文辞と対応、互いに発明すべきものがある。註にはこれらの対応すべき『楚辞』[8]の文辞を引用した。銘文は上段に漢字銘、下段に日本よみをほどこした。漢字銘中の・は欠字、×は誤字、◎は衍字、〔 〕はこの鏡にはないが他の鏡銘より補つたものである。

註

(1) 岡崎敬「立岩遺跡発見の前漢鏡とその銘文」一九六三年

(2) 富岡謙蔵「九州北部に於ける銅剣銅鉾及び弥生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」(「考古学雑誌」八―一九)、「九州北部出土の古鏡に就いて」、「再び日本出土の支那古鏡に就いて」(以上『古鏡の研究』所収)一九二〇年

(3) 梅原末治「須玖岡本発見の古鏡に就いて」(京都大学考古学研究報告一一)一九三〇年

(4) 梅原末治「筑前国井原発見鏡片の復原」(「史林」一六―三、一九三一年、『日本考古学論攻』所収)

(5) 梅原末治「漢鏡とその文字」(平凡社版『書道全集』2中国漢)一九六二年

(6) 西田守夫「漢鏡銘拾遺」―連弧文清白鏡の陳列に当って(「ミュージアム」一六三号)一九六四年、「漢鏡銘補釈」―姚皎鏡の初句について(「ミュージアム」一五八号)一九六四年

(7) 駒井和愛「鏡鑑銘文と楚辞文学」(『中国古鏡の研究』所収)一九五三年

(8) 平凡社版中国古典文学全集第一巻「楚辞」(目加田誠)、一九六〇年。なほ目加田誠『屈原』(岩波新書)一九六七年参照。

1、内行花文「日有喜」銘鏡　　径一五・六センチ

鈕高一・一センチ、重量四三七グラム。内区は八弧の内行花文、鈕のまわりに十二曜文をおく。白銅質、完好である。銘帯には三十六字の銘文があり、銘文は漢隷、左の如くよむことができる。

日有喜、月有富。　日に喜びあり、月に富あり。

楽毋事、常得意。　楽みて事なく、常に意を得。

美人會、竿瑟侍。[2]　美人會して、竿瑟侍す。
賈市程、萬物平。　賈市程にして、萬物平らかなり。
老復丁、[3]死復生。　老、丁に復し、死、生に復す。
酔不知、醒旦星。　酔いては知らず、旦星に醒む。

註

（1）方格四乳草葉文鏡に「日有熹、宜酒食、長貴富、楽毋事」の銘のあるものがあり、ヴェトナムドンソンに発見例がある。須玖岡本出土の方格規矩鏡に「日有熹、月（有）富…憂患楽己未央」銘のものがある。

（2）「美人既酔」、「竿瑟狂会」（招魂）

（3）「長楽無極老復丁」（漢、史游、『急就章』）

2、重圏「精白」銘鏡　　径一七・八センチ

鈕高一・三センチ、重量六九八グラムをはかる。内、外二つの銘帯があり、鈕のまわりには、前者と同じく十二曜文をおく。白銅質で、残念ながらひびが入っている。銘文は角のつよい隷体、外銘帯には三五字、内銘帯には二四字の銘文をいれる。外銘帯にはかなりの文字の省略がある。

〔外銘帯〕

絜精白而事君。
愅而沄之弇明。
玄錫之澤流。
恐疏遠而日忘。
美。
外承之可兒。
令京。

永　而毋絶。

〔内銘帯〕

内清質(1)以昭明。　内清質にして以て昭明なり。

光煇象夫日月(2)。　光煇は夫の日月を象る。

心忽揚而願忠(3)。　心は忽ち揚つて忠を願う。

然壅塞而不泄(4)。　然れども壅塞して泄らず。

註

(1)「恐清質之不信兮」(九章)

(2)「与日月兮斉光」(九歌雲中君、九章涉江)

(3)「竊不自聊而願忠兮、或默點而汗之」(九弁)、「願忠其焉得」(同上)、「紛忳忳之願忠」(同上)

(4)「路壅絶而不通」(九弁)、「道壅塞而不通」(哀時通)「心純厖而不泄」(九章惜往日)

3、重圏「清白」銘鏡　　径一五・四センチ

鈕高一・一センチ、重量四九六グラム。鈕のまわりに、前者と同じく、十二曜文をおく。白銅質、小さなひびが入つたが、完好にちかい。銘文は前者にくらべて、まるみがある。外銘帯は四二字、内銘帯は二四字、脱字が少く、ほぼ意を通ずることができる。

〔外銘帯〕

絜清白而事君(1)。　清白を潔くして、君に事えしも、

愆沄驩之弇明(2)。　驩を沄がれ、明を弇れるを愆む。

忘疏遠而日忘。　疏遠にして、日に忘らるるを恐る。

懐糜美之窮噎。　糜美の窮噎を懐い、

外承驩之可説。　承驩の説ぶべきを外にし、

思窕佻之靈景。　窕佻（たをやかな）の靈景を慕う。
願永思而毋絶。　願くは、永えに思いて絶ゆる毋らん。
〔内銘帯〕
内清質以昭明。　内清質にして以て昭明なり。
光輝象夫日月。　光輝は夫の日月を象る。
心忽揚而願忠。　心は忽ち揚りて忠を願う。
然壅塞而不泄。　然れども壅塞して泄（とお）らず。

註

（1）「伏清白以死直兮」（離騒）「竭忠誠而事君兮」（惜誦）、「事君而不弐兮」（九章）
（2）西田守夫「漢鏡銘拾遺」（ミュージアム一九六四ノ三）
（3）「道卓遠而日忘兮」（九章）

4、内行花文「日有喜」銘鏡　径一八・二センチ

立岩遺跡発見の前漢鏡中、最大である。鈕高一・一五センチ、質量六七八グラム。内区は八弧の内行花文、鈕のまわりに十二曜文をいれる。この鏡は山崎一雄教授（名古屋大学理学部）の好意によつて分析値が明らかにされた。

	成分	%
主成分	銅	66.8
	鉛	5.2
	錫	27.3
微量成分	銀	0.05
	アルミニウム	0.04
	蒼鉛	0.04
	鉄	0.1
	ニッケル	0.06
	アンチモン	0.2
	砒素	0.2
合計		100.00%

この数値は主成分と微量成分との値の合計が一〇〇%になるように換算したものである。

銘帯には三五字の銘文をいれる。

日有喜、月有富。　日に喜びあり、月に富あり。

楽毌事、常得意。　楽みて事なく、常に意を得。

美人會、竿筩侍。　美人會して、竿筩侍す。

賈市程、萬物平。　賈市程にして、萬物平らかなり。

老復丁、死復生。　老、丁に復し、死、生に復す。

酔不知乎◎醒　酔いては知らずや、〔旦星に〕醒む。

5、内行花文「清白」銘鏡　　径一八・〇センチ

鈕高一・一五センチ、質量六四四グラム。白銅質、内区は八弧の内行花文、鈕のまわりに十二曜文をいれる。銘帯には三九字の銘文がある。

絜清白而事君。

×之玄錫之澤流。

恐疏而遠日忘。

懐美。

外承之可兒。

令京。

願兮永思而毋絶。
清光哉宜〔佳人〕。[1]

註

(1) この鏡では「清光哉宜」とあり、五島美術館蔵鏡には「光宜佳人」とあり、この行の文が「清光哉宜佳人」となるを知りうる。

6、重圏「姚皎」銘鏡　径一五・九センチ

鈕高一・一センチ、質量五六二グラム。白銅質、内外二帯の銘帯があり、鈕のまわりに十二曜文をいれる。外銘帯には三四字、内銘帯には二四字、ともに：の記号[1]より文章をはじめている。

〔外銘帯〕

姚皎光而煇美。　姚としてかがやき煇美なり。
挾佳都[2]而承間[3]。　佳都（よきみやびと）を挾んで間を承く。
懷驩察而惟予。　驩察を懷いて予れのみなるを惟う。
愛存神而不遷。　存神を愛して遷らず。
得乎竝執而不衰。　竝執を得て衰えず。
清照折而〔付君〕。清照　哲（あきらか）にして〔君に付す。〕

〔内銘帯〕

内清質以昭明。　内清質にして以て昭明なり。
光煇象夫日月。　光煇は夫の日月を象る。
心忽揚而願忠。　心は忽ち揚りて忠を願う。
然壅塞而不泄。　然れども壅塞して泄さず。

註

（1）前回の考釈では「清照折而…」よりはじまるとしたが、西田君の指摘するように、：の記号より文章がはじまる。初句中に省略があるのは不自然で、末尾に省略があるとすれば「清照折而…」は末尾の文とすべきである。

（2）西田守夫「漢鏡銘補釈」（ミュージアム一五八号）「惟佳人之永都」よき人のとわに美しきをおもい（九章）「惟佳人之独懐」よき人をひとりおもい（九章）

（3）「願承間而自察」おん間伺い、身のあかしたてんとねがいつつ（九章）

7、重圏「昭明」銘鏡　径九・八センチ

鈕高一・〇センチ、質量一六〇グラム。白銅質の中形鏡で、鋳上りもよく、文字も明瞭である。重圏であるが、銘帯は外圏にあり、内圏には渦状の文様をうずめるにとどめている。鈕のまわりにはこれまでの鏡と同じく、十二曜文をいれる。銘文はすべて二三字、衍字一字、欠字二字がある。鏡面には鉄製刀子の環頭部がさびて附着している。

内清質以昭明。
光輝象而夫日月。
心忽揚而願忠。
然壅塞而不泄。

8、内行花文「清白」銘鏡　径一八・〇五センチ（第1図）

鈕高〇・五五センチ、質量六五八グラムをはかる。白銅質、鋳上りもよく、また研磨のあとも鋭い。内区には八弧の内行花文、鈕のまわりに十二曜文をいれる。銘帯の銘文は左行三六字、かなりの欠字がある。

契清白而事君。
志沄驩之合明。
伋玄錫而流澤。
而恐疏遠而日忘。

而×・美人×・・。
外承・・可兑。
・・・・・・・。
而×永思而而絶。

9、内行花文「日光」銘鏡　　径四・九センチ（第2図）

立岩遺跡発見前漢鏡の最も小形品である。内区は八弧の内行花文、外区は銘帯で、四個の渦文と中に二字ずつ、計八字の銘文をいれている。鈕高一・三センチ、質量一八グラム、白銅質。

見日之光。　日の光あらわれれば
天下大明。　天下大いに明らかなり。

この形式の小形鏡の破片は須玖岡本にも発見されている。昭和三十八年五月、福岡市堤町丸尾の弥生式甕棺中より、環頭刀子とともに径五・〇センチをはかる立岩と同類の小形日光鏡が三面発見されている。

10、単圏「久不相見」銘鏡　　径七・二センチ（第3図）

鈕高〇・六五センチ、質量五八グラム。白銅質、鈕のまわりに放射状の線文があり、外区が銘帯と渦文と※状文を互いにはさんで、一字ずつ計八字の銘文が入る。鈕孔はかなり磨滅して使用のあとがみとめられる。

久不相見。　久しく相見ず
長毋相忘。　長く相忘る毋れ。

第1図　第35号甕棺発見の内行花文「清白」銘鏡　径18.5cm

第2図　第34号甕棺発見の小形「日光」鏡　径4.9cm

第3図　第39号甕棺発見の「久不相見」銘鏡　径7.2cm

第 4 図　　飯塚市立岩遺跡第35号甕棺発見の人骨と副葬品
（左方に鉄剣と鉄戈，右方に内行花文「清白」銘鏡がみえる）

A Study on the Mirrors of Pre-Han Period and their Inscriptions found from the Pottery-Coffins of Tateiwa Site of Yayoi Period, Fukuoka Prefecture.

Takashi OKAZAKI

Tateiwa is a famous site of Yayoi-Period of northern Kyusyu,

for this site was a factory of stone implements and many pottery-coffins were found before the War. In 1958, 1960, We could excavate a group of pottery-coffins by sudden discovery of mirrors in some coffins. We excavated 39 pottery-coffins and 30 pits there. We found bronze mirrors of Pre-Han periods, 1 bronze spear-head, and some iron implements. At that time, people used the stone implements. We think that the a family of the chief of this area had only possessed the mirrors and the metal-implements.

Pottery-Coffin	Finds
No. 10	6 mirrors, 1 bronze spear-head, 1 iron dagger. 1 iron plane, 2 whetstone.
No. 28	1 mirror, 1 iron-knife, 1 group of necklace made by 570 glass tube-beads.
No. 34	1 mirror, 1 iron dagger, 14 shell-bracelet.
No. 35	1 mirror, 1 iron dagger, 1 iron-halberd
No. 39	1 mirror, 1 iron dagger.

Large mirrors of pre-Han period were devided to two types by design. One is arc-design type, and the other is ring-design type. Small mirrors were divided to the same types. The inscriptions of mirrors represent the thought and the literature of Han period. One is described that the happiness is in the sun and the wealth in the moon, It is important that those inscriptions resembles the sentences and the words of "Ch'u-t'su" 楚辞 that Ch'ü Yüan 屈原, a poet of Ch'u country was believed to write.